よもやま歴史教室 2024

さまざまな歴史を学習することにより、心に栄養を与え、豊かに生きるヒントをみつけていただきたい。
皆様、ぜひご参加ください。

第 4 回

令和 6 年
9／21（土）
午後 2 時～

幕末大江戸の風景

― 津藩儒　齋藤拙堂の江戸見聞録 ―

講師　拙堂研究家・文学博士（拙堂の玄孫）　齋藤（さいとう） 正和（しょうわ） 先生

第 5 回

10／19（土）
午後 2 時～

江戸時代における村人たちの生活水準と生活保障

― 貧困をめぐる現代日本の歴史的位置 ―

講師　奈良大学文学部史学科教授　木下（きのした） 光生（みつお） 先生

第 6 回

11／16（土）
午後 2 時～

三重県の成り立ち

― 複雑怪奇な三重県 ―

講師　ライター　昼間（ひるま） たかし 先生

【会　場】　菰野町庁舎４階会議室
※東玄関よりお入りください。

【受講料】　各回２００円（高校生以下無料）

■当日受付にて、住所、氏名、連絡先をご記入ください。
※講演内容等は、予告なく変更となる場合がございます。
※天候等諸事情により中止や変更となる場合があります。
　中止等となる場合は 、 菰野町役場 HP 、 防災ラジオ等でお伝えいたします 。

各回詳細は裏面へ

【共　催】菰野町よもやま歴史サークル　菰野町（担当課:コミュニティ振興課 TEL 391-1160／FAX 328-5995）

令和６年
9／21（土）

午後２時～
講師　拙堂研究家・文学博士
（拙堂の玄孫）齋藤 正和 先生

幕末大江戸の風景
―　津藩儒　齋藤拙堂の江戸見聞録　―

講師紹介

菰野町在住。昭和５年（１９３０）に三重県津市に齋藤拙堂の玄孫として生まれる。津中学（旧制）八高（旧制一年）を経て、（新制）神戸大学経済学部へ。昭和２８年卒業。四日市倉庫株式会社（現日本トランスシティ株式会社）入社。社員、役員を歴任。平成１３年退社後、三重大学大学院、名古屋大学大学院に学び、平成２４年（２０１２）博士（文学）を授与される。齋藤拙堂顕彰会顧問。藤堂藩五日会会員。

講演要旨

齋藤拙堂は伊勢の津藩の藩士で藩校第三代督学を務めた漢学者であった。その漢文作品は戦前の中学校の教科書にも載っていたし、彼の代表作『拙堂文話』は、戦後の今日でも中国では出版され読まれている。その『拙堂文話』という著書は拙堂が三十四歳のとき出版された彼のデビュー作であったが、本日はその第八巻にある天保の頃の江戸を描いた文章を紹介する。江戸は、天下の城下町として、日本中から出てきた武士が住む一大消費都市であって、商業活動が活発であり、鉄砲洲など港には回船が多く停泊し、日本橋の魚河岸も繁盛している。あらゆる文化が繁栄して、中国歴代の首都をも凌駕する大都会である。江戸には優れた庭園があり、人々は花見や花火、祭りなどの年中行事、あるいは相撲や歌舞伎を楽しんでいる。また、参勤交代や江戸城への定期登城の時の大名行列が見られるなどのことを、江戸に生まれ育った拙堂は誇らしげに描写しているのである。

10／19（土）

午後２時～
講師 奈良大学文学部史学科教授
木下 光生 先生

江戸時代における村人たちの生活水準と生活保障

講師紹介

1973 年福岡県久留米市生まれ、名古屋市育ち。立命館大学文学部史学科卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。現在、奈良大学文学部史学科教授。
専門は、近世日本の貧困史、賤民史、葬送史。主な著書に、『貧困と自己責任の近世日本史』（人文書院、2017 年）、『ロスジェネのすべて』（共著、あけび書房、2020 年）、『近世三昧聖と葬送文化』（塙書房、2010 年）、『日本葬制史』（共著、吉川弘文館、2012 年）など。

講演要旨

本講演では、「食べる」や「住む」といった事柄に代表される生活水準において、江戸時代の村人たちにとって何が「普通」の生活だったのかを検証し、その「普通」の生活水準を保つことに対し、誰が、どのように、どれほどそれを保障しようとしていたのか、ないし、保障しようとしていなかったのかを検討していきます。

一般に、「むかしの人たちは、今の人たちよりも、お互いに助け合って生きていた」とイメージされることが多いかと思います。ですが、はたして「むかしの人たち」は、「助け合い」の精神に満ちあふれていたのでしょうか？　「お前が貧乏なのは、お前の努力が足りないせいだ」という自己責任観とは無縁だったのでしょうか？　こうした生活水準と生活保障をめぐる江戸時代の特徴を検証しながら、「貧困と自己責任」をめぐる 21 世紀日本の歴史的位置を考えていきたいと思います。

11／16（土）

午後２時～
講師 ライター　昼間 たかし 先生

三重県の成り立ち
―　複雑怪奇な三重県　―

講師紹介

1975年岡山県生まれのルポライター、著作家。
岡山県立金川高等学校、立正大学文学部史学科卒業後、東京大学大学院情報学環教育部修了。知られざる文化や市井の人々の姿を描くため、各地を旅しながら取材を続けている。最近は、AIなど最新技術を活用した地方創生などにも積極的に携わる。大学卒業後、広永横穴墓群の発掘調査で1年ほど川越町に住んだことが三重県との縁の始まり。城跡の調査と聞いていたら、掘っていて横穴墓だと判明したのは、よい思い出。それくらいに、三重県は「意外な発見」に満ちた土地だと確信。伊勢神宮だけでなく、三重県のすべての地域に独特の魅力があると考える。鈴鹿山脈越えのサイクリングを計画中だが未達成。著書に『これでいいのか三重県』『岡山はすごいんじゃ!!』『東京バブルの正体』など多数。

講演要旨

「三重県の成り立ち」と一口に言っても、その歴史的経緯は複雑で興味深いものです。本講演では、明治初期の行政区画再編の中で、三重県がどのように形成されていったかを解説します。

特に注目したいのは、東紀州。北勢の人にとっては「なぜ、あそこが三重県なのか？」と疑問に思われている人も多いのではないでしょうか。

ほかの地域も、菰野藩を始め大小の藩が合併した経緯から、県名や主導権（県庁所在地）をめぐり火花が散ったりと、実に歴史的な好奇心がつきないと思います。

これらの経緯が現在の三重県の地域性にどのような影響を与えているのか、さらには今後の地域振興にどうつながっていくのかについても考察します。